祥伝社新書

SHODENSHA SHINSHO

ヘンリー・S・ストークス

英国人記者が見た 連合国戦勝史観の虚妄

「日本＝戦争犯罪国家」論を信じて疑わなかったベテランジャーナリストの歴史観は、なぜ変わったのか？

歴史の嘘が見抜けると、評判のベストセラー！

祥伝社新書

英国人記者が見た 連合国戦勝史観の虚妄 ヘンリー・S・ストークス

祥伝社新書 351

9784396113513

1920221008007

ISBN978-4-396-11351-3
C0221 ¥800E

定価：本体800円＋税

H・S・ストークス

1938年英国生まれ。61年オックスフォード大学修士課程修了後、62年フィナンシャル・タイムズ社入社。64年東京支局初代支局長、67年ザ・タイムズ東京支局長、78年ニューヨーク・タイムズ東京支局長を歴任。三島由紀夫と最も親しかった外国人記者としても知られる。著書に『三島由紀夫 生と死』（徳間書店）、『なぜアメリカは、対日戦争を仕掛けたのか』（祥伝社新書、加瀬英明氏との共著）。

英国の知性が見た、日本の戦後（本書の目次）

第1章 故郷イギリスで見たアメリカ軍の戦車
第2章 日本だけが戦争犯罪国家なのか
第3章 三島由紀夫が死を賭して問うたもの
第4章 橋下市長の記者会見と慰安婦問題
第5章 蔣介石、毛沢東も否定した「南京大虐殺」
第6章 『英霊の聲』とは何だったか
第7章 日本はアジアの希望の光
第8章 私が会ったアジアのリーダーたち
第9章 私の心に残る人々
終 章 日本人は日本を見直そう

第四章　橋下市長の記者会見と慰安婦問題

橋下大阪市長の失策

「慰安婦」問題について、橋下徹大阪市長が日本外国特派員協会で、記者会見を行なった。

三〇〇名以上の外国メディアの特派員、ジャーナリストが集ったため、メインの記者会見場は、立ち見で取材をするスペースもなく、別に二つの中継会場を設けたが、そこも満杯となった。エレベーター前から控室までの廊下も、テレビカメラやスチール写真のためのカメラによって埋め尽くされた。

記者会見場がある二〇階のみならず、記者のワークルームや、図書室のある一九階も記者たちで溢れていた。一九階から二〇階へ通じる階段も、カメラマンでいっぱいだった。いったいどんな写真が撮れるというのだろう。私もこれほど多くの人で溢れた記者クラブを見たのは、初めてだった。立ち見すらできない特派員も多かった。

二〇一二（平成二十四）年九月に、安倍晋三氏をはじめ自民党の総裁選の候補者五人が揃った時も、これほどの報道陣は集まらなかった。あの時の一〇倍はカメラマンが来ていた。

橋下市長は、すでに印刷されたペーパーを日英両語で用意していた。いつもカメラに映

るエネルギッシュな印象と違って、神妙な面持ちだった。真剣な顔つきで「私がほんとうに言いたいのは……（What I really want to say……）」と繰り返した。

初心な政治家しか、そんな言い方をしない。自分の能力が不十分であることを告白しているようなものだ。「私が言いたいのは……」と言うのは、まわりくどい。

橋下市長は、いつも時間の許す限りすべての質問に答えるという姿勢で、記者会見に臨んでいるそうだが、質疑応答は間延びして、緊迫感を欠いていた。

中身について言えば、慰安婦の問題を、橋下市長はまるで日本だけが批判をされているように受けとめていた。そんなことはない。戦場での性の問題は世界中で論じられていて、人権問題として取り上げられている。だが「なぜ日本だけが問題とされるのか」との発言が逆手に取られて、「他の国もやっているじゃないか」と弁明しているように、発信されてしまった。橋下市長が発言の真意が伝わらないことに、苦労しているようで、気の毒だった。

私の半分にも満たない年齢で、前途有望な政治家であり、これだけメディアを集めるパワーもある。だがテレビの人気番組の出身だから、マスコミを甘く見ていたにちがいない。彼には一流のアドバイザーが必要だった。そうすれば「売春は世界最古の職業だ」と

ウィットをもって、話題を拡げることもできたろう。

初めて日本にやってきた日の東京での夜

実は、私は初めて日本にやってきた日の夜に、女性を勧められた。一九六四（昭和三十九）年だが、外務省はそうした接待をしていた。銀座のバーに連れていかれ、まるで食事を振る舞うように、女性を連れて帰るように勧められた。

私は若い東京支局長だった。ホテル・オークラに一人で泊まっていた。私が求めたわけではないのに、部屋に会ったことのない女性がいたこともあった。アレンジをしたのは、外務省の報道課長だった。しかし、こうした「慣習」は、東京オリンピック後、なくなった。商談をする部屋に、無料のタバコが置かれる「慣習」がなくなったのと、同じことだ。

こうした「慣習」は日本だけではなく、世界中どこでもあった。会議でタバコを吸うのが、普通の光景だった。売春は東京オリンピックの前に、違法となった。

一九六七年のことだったが、当時、私は『ロンドン・タイムズ』などの東京支局長をしていた。『ロンドン・タイムズ』のオーナーでカナダ人のロイ・トンプソンが東京にやってきた。

巨漢で、七十歳だった。当時の唯一の国際空港だった羽田に出迎えたが、秘書を連れていなかったので、私が秘書役をさせられると直感した。

彼は銀座のバーに行きたがった。女性の世界に浸りたかったのだ。こういう展開になるのを恐れていたが、案の定だった。私は男性に女性をあてがうことをしたことが、なかった。もちろん、男性をあてがった経験もない。

そうした出来事は、その後、二度あった。若いジャーナリストがやってきたが、そうした接待に興味津々だった。今と状況が違ったのだ。

〝慰安婦〟の進化した形が、東京にも見られたことは、よく知られた事実だ。政府のお膝元で、〝慰安婦〟による接待が行なわれていた。

トンプソンは、「ようし、今夜は、繰り出そう。ミスター・ストークス、案内してくれるね」と言った。そこで赤坂を訪れた。

慰安婦問題が取り沙汰されるようになって、四〇年前の出来事を想い出したというわけだ。

朝鮮戦争の時も、ベトナム戦争の時も、戦場にはかならず慰安婦がいた。

田中角栄も墓穴を掘った危険な記者会見

私が橋下市長だったら、慰安婦問題をどう話したか。記者会見をしないという選択肢もあったと思う。

日本外国特派員協会の記者会見は両刃の剣で、けっして甘いものではない。ライオンの口の中に頭を入れるようなもので、いつ噛みつかれるかもしれない。記者は残忍だ。温情は期待できない。特に政治家に厳しい。

私は角さん（田中角栄元首相）と、親しかった。角さんの母上とも、親しくしていた。目白御殿（田中邸）を何度も訪ねた。初めて会ったのは、角さんが大蔵大臣になった時だった。日本経済新聞社が取り持って、『フィナンシャル・タイムズ』東京支局長として、大蔵省で単独会見を行なった。

その時は、大蔵省に行くべきなのに、何を勘違いしたか、私は外務省に行ってしまった。外務省で、「田中大臣は大蔵省だ」と言われた。当時は、外国特派員の取材はめずらしく、皆が親切に対応してくれた。インタビューは、私が日本語で行ない、時折、大蔵官僚が通訳の労をとってくれた。

角さんはインタビューの間、私の名刺を指で忙しそうに叩いた。イライラしていたので

はなく、エネルギーが溢れ出していたのだ。ボルテージが高い人物だった。

角さんは、横柄で、頭が切れる大蔵省の官僚に囲まれていた。だが私がすごいと思ったのは、角さんが大蔵官僚を恐れていなかったことだ。何でも自由に話せといった雰囲気で、彼らに本音を語らせた。角さんは「コンピューター付きブルドーザー」と形容されていたが、瞬時に出てくる数字は、大蔵官僚の上をいっていた。

その後に党の幹事長となって辣腕を振るい、首相となって「日本列島改造論」をぶち上げ、すごい馬力で政策を遂行していった。大衆から「今太閤」と支持され、独特の「田中節」の演説によって大衆を魅了した、実力派の首相だった。

そんな角さんが逮捕される発端となったのが、日本外国特派員協会での質疑応答だった。角さんは回答の準備をしてなかった質問に、答えてしまった。「文藝春秋」の「田中金脈」を暴いた記事が重要なことはわかっていたが、その質問に対する準備をしていなかった。

秘書の早坂茂三氏はメディアを担当していて、私を含め多くの外国特派員を知っていた。早坂氏は角さんに事前に準備させておくべきだった。記者会見をキャンセルすることも、選択肢のひとつだった。

首相にとってマイナスになる可能性があるのなら、キャンセルすることが重要だ。場合によっては、訊問するような姿勢で追及してくる記者もいる。回答できない質問には、「ノー・コメントと言って片付けることもできる」と、早坂氏はアドバイスすることもできた。

日本の大新聞の記者は、日本独特の記者クラブ制度や、政治家の〝番記者〟システムによって、政治家にすっかり懐柔されて、飼い馴らされている。それによって政治家の側に記者を恐れるということがない。角さんの場合、そのことが致命的となった。

田中角栄首相がロッキード事件で逮捕される以前にも、鳩山一郎首相の例があった。早坂氏は一九四六（昭和二十一）年の春に、日本外国特派員協会で起こったことを、事前にブリーフィングしておくべきだった。

日本外国特派員協会のディナー・パーティーに招かれた鳩山首相は、酒を持参した。鳩山としては日本の儀礼として、倶楽部に酒を贈呈したのだろうが、外国特派員は、賄賂として受け止めた。もっとも、日本の慣習に無知な外国記者のほうが、咎められるべきかもしれないが、結果として悪意を持ってしまった。

カナダ人のマーク・ゲイン記者が、そうだった。日本の首相に向かって敵対的な質問を

次々と浴びせ、鳩山は面子を失った。翌日の日本の新聞に、鳩山が政治家として失格だと批判する記事が載った。連合国総司令部が、鳩山を政界から追放する指令を下す展開になった。

鳩山は占領下の六年間、政界から追われてしまった。早坂氏もこのことは知らなかったのかもしれない。

それなら、角さんはどうしたらよかったか、私に相談してくれれば、よかった。しかし、多忙だったのだろう。当時は、中国との国交回復後で、秘書も大忙しだった。

鳩山の例に照らしてみても、外国人記者倶楽部は、危険地帯だとわかる。橋下市長も、角さんに起こったことなどを調べて、もっと警戒するべきだった。

橋下市長の「慰安婦」に関する一連の報道は、彼が女性の人権をないがしろにしているという印象を与えた。もちろん、橋下市長は不本意だろう。そこで日本外国特派員協会で、あの記者会見を開いた。

効果的に伝えたいなら、もっと違ったやりかたがあったろう。テレビで、日本で尊敬されている女性と対談をするという手もあった。また会場にしても、ホテルのような中立的な場所で会見したほうが、まだよかった。外国人記者倶楽部は、中立の場ではない。

戦場における「慰安婦」の歴史

ここで、戦場における「慰安婦」の歴史をざっと概観してみよう。

ヨーロッパ人から見ると、十八世紀まではヨーロッパ全土を巻き込む戦争がなかった。戦闘は市街地ではなく、広大な平野や山間部で行なわれた。死者も破壊も限定されていた。それがナポレオンの征服戦争で、すべてが変わった。戦争は大規模になり、この暴力がヨーロッパからアジアへと拡散していった。アヘン戦争も、その一例だ。

現代病としての戦争は、ナポレオンから広まり、社会全体に塗炭の苦しみを与えるようになった。ナポレオンによって戦争のありかたが変わり、国全体を巻き込むようになった。

この過程で、兵士相手の売春も拡大した。かつて戦場に伴われた女性は、トロイ戦争のヘレンのような王族だけだったが、今日ではシリア、レバノンなどの戦争地帯は、パリ、ロンドン、ニューヨークとならんで世界屈指の売春地帯となっている。

売春はビッグ・ビジネスだ。商魂たくましい女衒は、チャンスを見逃さない。売春は世界で最古の商売であり、売春を世の中から根絶させることは、戦争をこの世から消滅させるぐらいに難しい。

女性や子どもは、誰よりも保護されるべき存在だが、戦争における人権の蹂躙は女性に限らない。

歴史を振り返れば、日本は兵士の性処理に当たっておおむね秩序を保って対応した。戦場のどこであっても、現地の女性の人権が蹂躙されることがないように、「慰安所」を設置した。性病が蔓延して、軍として機能しなくなった歴史の教訓がある。慰安所の存在が、一般女性への強姦を防ぐことにもなった。日本は女性の人権に、他国よりもはるかに配慮していた。

慰安婦の問題は、今後も戦争のたびに論議されよう。私もベトナムでその現実を目にした。今日のホーチミン市にあたるサイゴンには、売春婦が屯していた。韓国も、他国のことを批判できるような立場にはない。アメリカも日本を占領した時に、真っ先に要求したのが、アメリカ兵のために売春施設を設けることだった。

ＧＨＱの総司令部内部で、キリスト教グループと賛否をめぐって、闘ぎ合いもあった。アメリカに渡って植民地を築いたのは、清教徒たちだった。アメリカ占領軍には清廉なクリスチャンもいれば、世俗的な幹部もいた。

今日のマカオの賭博場での最高のサービスは、セックスだ。一般の社会でも、慰安婦が

厳然として存在している。性サービスが終焉する日が来るだろうか。答はノーだ。それどころか拡大している。

ペリーは大勢の男たちを引き連れて、アメリカからアフリカの喜望峰を回って、日本までやってきた。黒船艦隊に乗っていた男たちの夢は、東洋の女性と性交をしまくることだった。

現代では売春は違法として取り締まられているが、今日の銀座でも闇商売として存在していよう。

韓国の主張に対する説得力ある反論

慰安婦問題について、加瀬氏が風刺に満ちた論文を書いている。指摘したのは、韓国の慰安婦問題だ。加瀬氏はかつて韓国を訪れて実情を目にしているから、説得力がある。当時、『東亜日報』などの大手新聞にも「慰安婦」という表現をそのまま使った募集広告が出ていたという。

さらに宋玉連・金栄編著『軍隊と性暴力―朝鮮半島の20世紀』という韓国の学者がまとめた研究報告から引用して、韓国の主張を論破しているが、その報告書によると、朝鮮戦

争勃発により、韓国に米兵相手の慰安婦が誕生し、彼女たちは「洋公主」（外人向け王女）、「洋ガルポ」（外人向け売春婦）、「国連夫人」などと呼ばれ、また米軍のための売春地区は、「基地村」と呼ばれていた。

そして慰安婦の目的を、「第一に一般女性を保護するため、第二に韓国政府から米軍兵士に感謝の意を示すため、第三に兵士の士気高揚のため」と報告している。韓国陸軍の「慰安婦」に関する研究が発表されると、国防部資料室にあった「韓国軍慰安婦関連資料」の閲覧が、禁止された。

加瀬氏は、「ソウルの国会と、アメリカ大使館前にも、慰安婦像を設置することになるのだろうか」と、痛烈な皮肉で論文を締め括っている。

茂木弘道氏の論考は、いまでは外国特派員の中でよく知られた存在になっているが、論理的で、説得力がある。残念ながら英語でそうした反論を発信している人が、他にいない。茂木論文は、論理が緻密に構築されている。そのなかで、私が注目したのは「歴史通」誌に掲載された「慰安婦の素顔」という論文だ。

この論文が上手いのは、韓国人が主張している視点を、日本側の論拠としている点だ。たとえば、アメリカの国会図書館にある慰安婦に関する「朝鮮人に対する特別尋問」とい

う資料のなかで、太平洋戦争中にアメリカ軍が捕えて訊問した、朝鮮人軍属がこう答えている。

「太平洋の戦場で会った朝鮮人慰安婦は、すべて売春婦か、両親に売られたものばかりである。もしも女性たちを強制動員すれば、老人も若者も朝鮮人は激怒して決起し、どんな報復を受けようと日本人を殺すだろう」

茂木氏は「誇り高い韓国人なら当然こう言うだろうし、実際もし強制連行などが行なわれたなら、間違いなく暴動が起こったであろう、と納得した」と、コメントしている。

また、「韓国人が言わなかったこと」も、論拠にしている。李承晩のことだ。

李承晩大統領は強硬な反日政策で知られるが、徴用に対する補償も含め、あらゆる要求を敗戦国日本に突きつけた。だが、その李承晩でさえも、「慰安婦に補償をしろなどという、あまりにも非常識なことは言わなかった。当たり前である。別に慰安婦のことが知られていなかったのではなく、当時は慰安婦がどういうものか、誰でも知っていたからである」と、結んでいる。

米国の資料にみる、日本の「慰安所」の実態

「慰安婦」という表現は、それ自体が婉曲表現のように感じられて、ストレートに受け入れ難い。日本人や韓国人は、そうした婉曲表現が自然に受け入れられるのかもしれないが、欧米人や特にジャーナリストには、うさんくさく感じられる。

もっとも、マッカーサー元帥が厚木に着陸してすぐに、日本政府に要求して開設させた、アメリカ兵のための売春施設は、アメリカ軍によって「レクリエーション・センター」と命名されたから、同じことだ。

むしろ、「性奴隷」という表現のほうが、真実のようでしっくりくる。これは、アメリカの黒人奴隷の女性のように、所有者が慰み物にした体験があるから、実感できる。集団レイプや大虐殺も、体験があるので、ストレートに受け入れられる。「性奴隷」は、実に忌まわしい表現だが、実際に存在したので、不自然ではない。

ところが「慰安婦」という表現は、いかにも忌まわしい実体を、誤魔化しているように響く、端から実体を隠しているように、聞こえる。

そもそも、日本には、歴史を通して奴隷制度がなかった。まして、女性を「性奴隷」としたことなどなかった。

戦争も、西洋のように大虐殺や、女性の強姦を伴わなかった。戦国時代の合戦は兵同士のもので、民衆を巻き込まなかった。

農民は合戦があると、弁当を持参で土手の上などから、見物した。

戦国時代が終わって、ほどなくして、徳川幕府による江戸時代が始まった。日本では二六〇年におよぶ平和が、明治維新まで続いた。

むしろ男女の大虐殺や、処女の集団強姦は、キリスト教世界のお家芸だ。たとえば、聖書の「民数記（みんすうき）」では、神の宣託を受けたモーゼが、異教徒は、「男も女も全員虐殺」することを命じている。さらに、「男を知らない処女は、分かち合え」というのだから、恐ろしい。

日本の「慰安婦」の実体は、もちろん「性奴隷」ではまったくない。売春婦だった。そのことを、米国側の資料が裏付けしている。

米国戦争情報室の心理戦争チームの報告によると、一九四四（昭和十九）年八月、ビルマ奥地のミッチーナで朝鮮人（当時は日本国籍）慰安婦（コンフォート・ガール）を聞き取り調査し、「売春婦（プロスティチュート）にすぎない」、商売目的の「キャンプ・フォロワー」だとしている。

ここで言うキャンプ・フォロワーとは、兵士たちを追って、「世界最古の商売」を展開

する女性たちを意味している。

スタインベックの小説『エデンの東』にも描かれているが、西部開拓時代に、娼婦を乗せたワゴンが、男たちを追って戦場を走り回った。

米国の報告書は、日本軍の慰安所や慰安婦の実情を、詳細に述べている。それによると、「奴隷」どころか、慰安婦のほうがはるかに立場が上のように感じてしまう。

慰安所の団体待合室で兵士は、サービスを受ける順番を待つ。兵士は、お互いに恥ずかしそうでもあった。需要が供給より多いので、自由時間にサービスを受けられず、がっかりして兵舎にもどる兵士もいた。酔っ払っている客は、拒否もできた。

慰安婦は将兵とピクニックに行ったり、スポーツを楽しんだりしていた。故郷に帰ることも、自由にできた慰安婦たちもいた。

「奴隷（スレイブ）」と表現するのが、まったく間違いなのは、慰安婦はサービスを提供して、その対価を得ていたことである。上等兵が月一〇円の収入であるのに対し、慰安婦は、その三〇倍の三〇〇円の月収を得ていた。これは高級娼婦だ。

では、日本はどのように対処すべきか

朝鮮人の文玉珠は、九〇年代に東京地方裁判所で訴訟を起こした。半世紀前に慰安婦として得たはずの収入の返還を求めるものだった。調査の結果、残高は二万六〇〇〇円だった。戦時中であれば、東京に大きな家を五軒建てられる金額に相当する。

「史実を世界に発信する会」などから、英文で提供される資料を読むうちに、日本の将兵がいかに慰安婦を大切に扱っていたか、痛感した。さらに、慰安婦も、戦地で戦う将兵を、心と体で支えていたのだと思うようになった。

慰安婦の名誉のために、「性奴隷」という名誉の毀損は、許されない。彼女たちも、今日、明日は命を失うかもしれない母国の戦士たちと、心情をひとつにしていたのだ。

一九四四（昭和十九）年の秋に、中国とビルマの国境にあった拉孟要塞で起こった出来事は、特筆に値する。

米軍指導下の支那軍五万人が、一二〇〇名の日本将兵が守る要塞を攻めた。慰安婦も、要塞へ逃げ込んだ。戦闘は四カ月に及んだが、玉砕より道はなかった。守備隊長は慰安婦に、山を降りて投降することを勧めた。

二〇人の慰安婦のうち、日本人女性一五人は要塞に残り、全滅した。

五人の朝鮮人慰安婦は、守備隊長に「日本人でなければ、殺されない」と諭され、山を降りて米軍に保護された。

「性奴隷」という表現を使い出したのが日本人だった。外国メディアは、この表現に飛びついて、発信した。「南京大虐殺」も「従軍慰安婦」問題も、捏造された情報の発信源は、ほかならぬ日本人だった。

この「慰安婦問題」が大きく報道されると、日本人が邪悪だというイメージが、世界にひろめられた。

「世界史で、唯一、若い女性を狩って、外地へ連れ去り、悪を犯した罪深い国民」というイメージだ。

河野洋平内閣官房長官が遺憾の意を表明したが、事態は収束していない。日本人どうしは、「すみません」と謝ることで、帳消しにしてもらえるという文化がある。「もう謝っているのだから、許してあげようじゃないか」という慣習によって、対立を解消してきた。

しかし、国際社会では、謝罪することは、罪を認めることを意味し、認めた罪は償いをしなければならない。

日本はどのように対処すべきか。答は、すべての事実を明らかにして、発信してゆくべ

きだ。

中国や、韓国は、日本が反駁しないことをいいことに、謀略宣伝に利用している。

このままでは「慰安婦」問題は、ずっと日本が世界中から糾弾され続けることになる。

私が初めて訪韓した時は、私はまだ二十代の外国特派員だった。韓国について、旺盛な好奇心を持っていた。しかし、三十歳に近かったので、分別もあったから、危険な世界には、立ち入らなかった。

日本へ外国特派員として赴任した時のように、女性接待を受けたかといえば、そうしたことはなかった。ただ韓国人の同僚ジャーナリストから、夜の街に繰り出そうと誘われた。「とってもエキサイティングなところへ、案内するよ」と言われた。

この韓国人ジャーナリストは、私の親しい友人で、家が並んだ街へと案内してくれた。それぞれの家の入口に、一人か二人の女性がいた。赤線地帯だった。そんなところを訪れたのは、初めてだった。

友人が一軒の家に入っていった。私も別な家へと入ってみた。するとわずか五分か、七分かそこいらで、友人が叫ぶのが聞こえた。

「ここを出る。行くぞ。ついて来い。もうここには、来ない」と、そう友人が言った。何

かトラブルがあったようだった。私は彼に従った。もともと赤線地帯に行きたいと、私が言い出したわけではなかった。私を口実に友人は、そこを訪れたかったのだろうが、私はそれほど強い好奇心は、湧かなかった。

一九七〇年代後半に、私は妻を同伴して韓国を二度訪れた。最初の夜は、妻と予約したホテルの部屋に入った。すると、フロントから電話が入った。

「あなたは、女性と同室している。どういうことなのか、説明してほしい」

と言うのだ。私は「降りていく必要などない。いるのは、私の妻だ」と言った。

「慰安婦」は、「性奴隷」ではない。当時は合法だった売春婦が、女衒に雇われて、軍人相手の商売をしていたというのが、事実だ。そうした売春婦の中には、親に売られたり、不幸な身の上を余儀なくされた女性たちもいただろう。

しかし強姦がまったくなかったと、そう主張することは、幻想的な話で、信憑性を欠く。「強姦はまったくなかった」と言うと、常識に照らしてありえない。

「強姦はまったくなかった」と言うのなら、日本には強姦事件が皆無であるはずだ。日本軍将兵には、「強姦はまったくなかった」としたら、それは奇跡のような出来事だ。

黒澤明は、そんなことを信じなかったろう。黒澤の有名な映画『羅生門』は、この問題

を主題としている。殺人と強姦をめぐって、四人の目撃者と三人の当事者が証言をする。しかし、それぞれが矛盾をしているので、真実がどこにあるのかがわからない。

私もその一人だが、日本を愛する外国人は、こうした極論を懸念している。「何かが（サムシング）・まったく存在しなかった（ディドント・イグジスト・アットオール）」という立ち場（ポジショニング）による主張は、極論に過ぎる。

第五章　蔣介石、毛沢東も否定した「南京大虐殺」